

令和元年6月14日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2018

課題番号：23730616

研究課題名(和文) キャリア志向の女性における母親としての発達 「母性愛」信奉傾向との関連

研究課題名(英文) Career-oriented women's development as a mother: The correlation with the belief of "Maternal love"

研究代表者

江上 園子 (Egami, Sonoko)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：10451452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、キャリア志向の女性が母親としてどのように発達していくか、「母性愛」信奉傾向との関連から質的・量的に明らかにしたものであった。具体的には、「母性愛」信奉傾向が「女性による子育ての正当化」と「母親の愛情の神聖視」のふたつの要素にわかれ、初産女性は「母親の愛情の神聖視」が高まることや、「母性愛」信奉傾向の捉え直し・母親としての自分の評価・キャリアの再定義というテーマの語りが見られることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで女性の産後離職の問題については、産休・育休制度などの職場環境や夫や親族によるサポートなどの環境的な要因に焦点が当てられてきた。そのような中で本研究は、キャリア志向の女性が自らの変化について振り返り、それによって自分のキャリアを再定義していく様子を描いた。女性の内面の変化や将来的な展望の捉え方について詳細に明らかにしたことで、環境的な条件だけではなく女性の内面の主観的な変化に寄り添うという姿勢が重要であると示せたことは意義があるといえよう。

研究成果の概要(英文)：This study examined career women's change in their adherence to "maternal love" through both quantitative and qualitative analyses. First, a scale for adherence to "maternal love" was turned out to be broken into two factors. Next, investigation of changes in the two factors from the prenatal to postnatal period showed that the score for "sanctification of motherly love" increased post-partum, as first-time mothers and their discourse changed dramatically. In addition, first-time mothers' narratives generated some main themes, and they changed in the following contexts: change in their impression for adherence to "maternal love," evaluation of themselves as mothers, and redefinitions of their careers.

研究分野：発達心理学

キーワード：キャリア志向 「母性愛」信奉傾向 多重役割 ワーク・ファミリー・バランス

1 . 研究開始当初の背景

「母性愛」信奉傾向 (江上, 2005) は, 子どもを大事にする気持ちとともに, 育児に専念することの意識の高さも含むものである。我が国では従来, 母親にはそのような心構えが必要だとされてきたが, それが強調されるがゆえに母親は追い詰められ, 逆に子どもとうまく向き合えないという指摘も多い (例えば大日向, 2000)。西洋でも, 母親の果たす役割を強調し, 子どもの不適応や精神病理に関して母親を非難するという“mother-blaming”を深刻かつ広範な問題ととらえている (Caplan & HallMcCorquodale, 1985)。さらに近年では社会や他者からの“blaming”だけでなく母親自身の“self-blaming”も示唆される (Jackson & Mannix, 2004) など, 看過できない社会問題である。しかし実際には, 子どもを持つ女性にとって「母性愛」信奉傾向が母親自身や育児場面でどのような影響を与えるのか, 検証されてこなかった。

そのような中で江上 (2005, 2007) は, 「母性愛」信奉傾向は母親をとりまく状況によってプラスにもマイナスにも影響を与える「両刃の剣」であることを実証してきた。そのなかでも, 江上 (2007) では, 常勤職の母親の場合, 職業満足度が高い場合は「母性愛」信奉傾向が子どもへポジティブな感情を多く表出させること, 一方で職業満足度が低い場合にはそのような影響を与えないことがわかった。また, パートタイム・フルタイムの別なく, 職業満足度が中程度の場合は, 「母性愛」信奉傾向が高いことが子どもへのネガティブな感情表出を増大させるという結果となった。この結果より, 母親にとって仕事を持っているかどうか, またはその仕事に満足しているかどうかということによって, 「母性愛」信奉傾向の意味が変わってくるということがわかった。

この結果は「母性愛」信奉傾向が職業を持つ母親にとって, 職業要因との関連で子育てに正負の影響を与えるということを実証した点で意義のあるものと言える。しかし, 母親がもともと仕事をしなくてその状況にあるのかどうかという点, すなわちキャリア志向の有無や強弱は問うていない。同じ仕事を持つ母親であっても, 希望して働いているのか, 金銭的な面からせざるを得ないのか, あるいは時間に余裕があるため働いているのか, ということによって母親の心理や行動は大いに異なる。また同様に, 同じく仕事をしていない専業主婦であっても, 望んでその立場にいるのか, 仕事をしなくてもできないのか, ということによって状況は違ってくる。江上 (2009) でも, 育児に専念したくはないのにそうせざるを得ない母親の場合に, 子どもや子育てに関するネガティブな語りが多く見られた。そのような母親は, 葛藤や困難のなかでどのように折り合いをつけるのか。自分の母親としての生活をどのように意味づけるのだろうか。職業の有無にかかわらず, 親になることは人間にとってさまざまな成長をもたらすものである (例えば牧野・中原, 1990, 柏木・若松, 1994)。そのため, 実際に仕事と子どもとの間の葛藤や育児・家事との両立の困難を抱えている母親たちも, 自分なりにバランスをとりながら親として発達していくのだと考えられるが, 幼児期の子どもがいる母親においてその時間的変化やプロセスを追いつつ明らかにした研究は稀少である。

我が国では現在, 共働きの世帯数が夫だけ働いている世帯数を上回る状態が続いている。このような中で出産時に育児休業を取得する女性は増えてつつも, 出産後も仕事を続ける女性の割合は増えていない (内閣府男女共同参画局, 2010)。したがって, キャリア志向を持ちながら「母性愛」信奉傾向も高く仕事が思うようにできていない女性, あるいは自分のキャリア志向が満たされるような仕事をしながらも育児との両立に困難をおぼえている女性の実態やその発達の過程を明らかにし, サポートや支援体制, 「ワーク・ライフ・バランス」を目指す社会のあり方について視点を提供する研究が必要であり, そのためには, 母親が抱く葛藤や困難の調整過程・親として発達していくプロセスを描いていける縦断的な調査が求められよう。

2 . 研究の目的

本研究は, キャリア志向を持つ女性が母親である自分をどのように意味づけ, 母親としてどのように発達していくか, 「母性愛」信奉傾向 (社会文化的通念として存在する伝統的性役割観に基づいた母親役割を信奉し, それに従って育児を実践する傾向) との関連から, 子育て期の母親のみならず, 出産前後の母親も対象に縦断的に明らかにするものである。キャリア志向が高い母親が, 第一子出産後にどのような変容を遂げるのかについてアンケート調査とインタビュー調査を併用し明らかにするとともに, 葛藤や困難とともに子どもとのかかわりの中で親として発達していく姿を丁寧に描写することも本研究の目的である。

3 . 研究の方法

本研究は, 第一に子育て中の母親に大規模なアンケート調査を行い, 「母性愛」信奉傾向とキャリア志向のはざまでも母親たちがどのようにして仕事と家庭との間で生じた葛藤や困難に対峙しているのか, 心理的な well-being に与える影響とともに検討した。調査協力者は保育園や幼

稚園を經由して依頼した。さらに、第一子によるフルタイム勤務女性の離職が問題提起されているにもかかわらず、当事者である女性の心理についての研究が稀少であることから、第一子の産前産後における女性たちの「母性愛」信奉傾向やその他の変容の有無とその内容に着目し、出産前後の母親を縦断的にインタビュー調査で追跡することとした。インタビュー調査では、スノーボールサンプリングによりキャリア志向が高い初産女性と経産女性を10名ずつ抽出し母親が抱えている葛藤や困難への対処の様子、母親としての自分の意味づけについて、それぞれの母親の語りからテーマティック・アナリシスによる分析を行った。

4. 研究成果

(1)2013 年度

初年度の研究成果としては日本発達心理学会第25回大会での自主シンポジウム企画および話題提供の他、日本心理学会での公募シンポジウムの企画および司会、日本保育学会での口頭発表、日本教育心理学会および30th International Academy of Familyでのポスター発表が挙げられる。日本発達心理学会での発表では、母親が「母性愛神話」・「三歳児神話」などの周囲からのジェンダーベクトルにさらされる中、どのように自分の生活や親としての意識を意味づけているのか、その揺らぎや葛藤も含めて個性記述的な分析を行った。中でももともとは「母性愛」信奉傾向が高い母親でも、出産後に自分のキャリア志向を自覚して脱・伝統的な性役割観を持つようになるなど、興味深い事例を取り上げた。これは、キャリア志向の母親が「母性愛」信奉傾向との狭間でどのように成長・発達していくのかという本研究の大きな命題と関連のある代表事例であり、今後、質問紙調査を行う上で多くの示唆も得られた。またその他の学会では、「母性愛」信奉傾向は本人だけの問題ではなく、とくにパートナーである夫がどのように考えているかということが夫婦関係や母親の養育態度に影響しているという発表を行った。これも、面接調査において夫に関する項目を組み入れる重要性の確認、ならびに家族システム論の視点から母親をとらえる必要性の検証となりえた。そしてこの結果をまとめた論文は学会誌である「教育心理学研究」(査読つき)に掲載された。

さらに質問紙調査へ向けて、国内・海外の研究論文を精読し、研究のアウトラインを明確にすることができ、先行研究の精読および尺度項目の選定も行えた。海外のジャーナルの執筆者に問い合わせ、尺度を和訳する許可も得、日本語版を作成した。大規模な質問紙調査で使用する項目の選定はおおむね終了し、継続的に行っている面接調査のケース数も集まってきた。達成度としてはおおむね順調であったが、質問紙調査の実施までは行えなかった。

(2)2014～2016 年度

2014年度は、自分の出産のため研究中断を申し出、受理された。成果としては2013年度にシンポジウムで行った、「母性愛」信奉傾向に対する揺らぎ、葛藤を抱える母親の実態とその要因について調べた紀要論文の執筆があげられる。この論文では、インタビュー調査に協力を得た母親の母集団の中から、「母性愛」信奉について語らせる過程でとくにジェンダーベクトルの変容が見られる(見られた)母親について抽出し、変容の過程と要因にかかわる事例分析を行った。本プロジェクトの目的として、キャリア志向の母親が、子育てに従事する中でどのように変容するのか、または変容しないのか、自分のキャリア志向との間でどのように落とし所をつけるのかについて明らかにすることを挙げたが、本論文の中で、第一子出産という経験が、自分のキャリア志向と「母性愛」信奉傾向とを決定づける変容の大きな機会であることが考えられた。また、葛藤を抱えたままの母親が、その葛藤を困難としてではなく、母親としての自然な感情のひとつとして抱えていく姿が推察された。その他の成果としては、母親の「母性愛」信奉傾向とキャリア志向についてのインタビュー調査を、妊娠期・出産後にわたって縦断研究として発展させていったこともあげられよう。しかし、質問紙の尺度選定は終わっても、調査協力団の選定までは行えなかった。

2015年度は育児休業期間であったため、具体的な研究実績をあげることはできなかった。しかし、2016年度4月に予定されている「日本発達心理学会第27回大会」においてラウンドテーブルを企画し、研究発表も行うことから、その準備を行った(企画者と話題提供者を担当した)。ラウンドテーブルは「子育て中の親における仕事と家庭の主体的調整—“母親”または“家族”イデオロギーを超えて—」というタイトルであり、働きながら子どもを育てることが困難なわが国で、父親と母親がどのような葛藤を抱え、どのように主体的に対処しているかについて実際のデータを用いて議論するものであった。この企画の中で、「多重役割とキャリア女性—キャリア志向と「母性愛」信奉傾向の観点から—」という内容で話題提供を行うこととした。本話題提供では、キャリア志向を持ちつつも「母性愛」信奉傾向の高い母親を抽出し、その母親たちが具体的にどのような葛藤を抱えているのかについて明らかにする。そしてそれらの葛藤について個人がどのように折り合いをつけているのか、また、葛藤があっても多重役割を引き受け続けるのはなぜなのか、あるいは、葛藤がない母親もいるのかどうか、それはなぜか、ということについてインタビュー調査から記述的に探っていく。この話題提供による発表によって、キャリア志向を持ちつつ「母性愛」信奉傾向も抱えている母親の実態が見えてきたことから、次年度以降の大規模なアンケート調査でそれらの母親の実際の育児行動や親としての発達について研究していく際に着目すべき点が明らかになったことが大きな成果である。

2016年度は7月後半からが研究期間であった。7月末には 31st International Congress of Psychology にて、ポスター発表を行った。出産前後の母親の「母性愛」信奉傾向の推移について、初産婦と経産婦を比較検討したものである。その結果、アンケート調査からもインタビュー調査からも、初産の女性において産後に「母親の愛情の神聖視」の傾向が特異的に高まることがわかった。この結果から、我が国における第一子産後離職の高さとの関連も示唆された。10月には日本教育心理学会第58回総会でポスター発表を行った。親になる前の段階の青年期後期に該当する大学生を対象に、「養育性」の性差や「母性愛」信奉傾向や父親からの被養育経験や自我同一性などの促進要因との関連について発表した。3月には日本発達心理学会第28回大会でポスター発表を行った。初産女性の産前産後のインタビュー調査を分析したものである。全体的には「母親の愛情の神聖視」の傾向が高まるが、中には早期の職場復帰を希望する母親も見られるなど、いくつかのパターンが抽出された。年度末には、これまでの研究成果をまとめた「キャリア志向の女性における出産前後の『母性愛』信奉傾向の変容」と題した学術論文を執筆し、日本発達心理学会に投稿した（現在は審査中である）。内容としては、キャリア女性の出産前後にわたる「母性愛」信奉傾向の変化を量的・質的に分析・検討したものである。具体的には、研究では先行研究の1260名のデータを用いて「母性愛」信奉傾向が「女性による子育ての正当化」と「母親の愛情の神聖視」の二次元に分類される可能性を確認的因子分析にて検証し、研究では初産女性10名と経産女性10名を対象にしてそれぞれの因子得点の出産前後での変化の有無と女性たちが語る内容の変容をテーマティック・アナリシスにより探ったものである。

(3)2017 年度

当該年度の実績としては、学会誌論文への掲載1編、国内学会での発表が2件、研究会での発表が1件であった。その他、年度内に進行中であり未発表の2件の調査も挙げられる。

学会誌に掲載された論文は「発達心理学研究」（査読つき）の「キャリア志向の女性における出産前後の『母性愛』信奉傾向の変容」であるが、本論文ではキャリア志向の女性が出産前後にどのように変容するのか、縦断研究によって明らかにした。具体的には、アンケート調査とインタビュー調査を併用して、第一子産後に女性は自分の中に生じた心理的な変化を自覚し（あるいは変化がないということを知覚し）、母親としての自分を評価し、キャリアの再定義を行うという姿を描いた。とくにその変化については、性別役割分業的な意識ではなく、母親としての愛情を神聖視するような意識が関連していると示唆した。これは、我が国で第一子産後に離職する女性が未だに半数にのぼるという事象の心理的な説明として応用できるかもしれない。

国内学会では、「日本心理学会第81回大会」と「日本発達心理学会第29回大会」にて、学会誌論文の内容の一部と、新たに収集したアンケート調査によるデータの予備的な検討についてポスター発表を行った。主催しているWork & Family研究会でも、キャリア志向の女性たちが産後にどのように変化していくか、タイプ分けを試みた結果を発表した。

最終年度である2018年度に、終了したアンケート調査の結果をまとめて学会誌に投稿する予定を立てた。また、産前産後のインタビュー調査を続行するための計画も立てた。2017年度は、助成が開始された当初から行ってきたインタビュー調査による縦断研究が、学会誌に掲載され、新たな大規模アンケート調査も行うことができ、途中ではあるがその成果を学会にて発表することができた。なお、主催している研究会でも自分の研究発表を行うことで、多くの示唆を得ることができた。

(4)2018 年度

最終年度の研究成果としては、学会でのラウンドテーブルにおける発表が2件、ポスター発表が1件であった。

学会発表の内容として、最初に日本教育心理学会第60回総会にて「キャリア志向及び『母性愛』信奉傾向とワーク・ファミリー・コンフリクトとの関連 就業形態による検討」というテーマでポスター発表を行った。キャリア志向と「母性愛」信奉傾向との持ち方がワーク・ファミリー・コンフリクトとの交絡で母親の心理的な well-being に影響するプロセスを検証したものである。キャリア志向の高さがフルタイム勤務女性において重要な動機づけとなることが明らかになった。次に日本発達心理学会第30回大会にて、「伝統的なジェンダー役割観は変わりうるのか その兆しを探る」では、「乳幼児を養育中のフルタイム勤務女性が抱える葛藤とその解決」という演題で企画の補佐と口頭発表を行った。フルタイム勤務女性の中には、仕事と家庭との多重役割を担いながら、子どもに対する影響を懸念して悩む姿も見られた。また葛藤の解決方法として、具体的に能動的に動いている女性の方が心理的な well-being が高いこともわかった。もうひとつの口頭発表は「成人女性の実情をデータから読みとる キャリア、子育て研究からとらえる女性たちの今」というラウンドテーブルで「」という演題で行った。内容としては、2017年度に掲載された学会誌論文の内容を発展させたもので、キャリア志向の女性たちにおいて第一子産後でどのような個人差が見出されるか、グルーピングした結果を発表した。

その他、キャリア志向と「母性愛」信奉傾向の持ち方とワーク・ファミリー・コンフリクトが女性の心理的な健康にどのように作用するか検討した論文をまとめることはできたが、当該年度には掲載に至らなかった。研究期間は終わるが、今後もこの論文が学会誌に掲載されるよう精練させていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- 江上園子 (2017). キャリア志向の女性における出産前後の「母性愛」信奉傾向の変容. 発達心理学研究, 28, 154-164.
- 江上園子 (2014). 養育者としての意識と性役割観との融和・相克：母親の語りに見られる"揺らく"姿. 愛媛大学教育学部紀要, 61, 21-29.
- 江上園子 (2013). 「母性愛」信奉傾向が夫婦関係と養育態度に与える影響——父親と母親の「母性愛」信奉傾向の交互作用に着目して——. 教育心理学研究, 61, 169-180.

〔学会発表〕(計 13 件)

(国際学会)

- Sonoko EGAMI (2016). Japanese women's adherence to "Maternal Love": The change from prenatal to postnatal period. 31th International Congress of Psychology (Yokohama).
- Sonoko EGAMI (2013). Effect of fathers' adherence to "Maternal Love" on their parenting style. 30th International Academy of Family (Tokyo).

(国内学会)

- 渡邊ひとみ・伴碧・野崎華世・江上園子・蒲谷慎介 (2019). 成人女性の実情をデータから読みとる キャリア, 子育て研究からとらえる女性たちの今 . 日本発達心理学会第 30 回大会(東京).
- 大野祥子・江上園子・平井美佳・渡邊寛・高橋恵子 (2019). 伝統的なジェンダー役割観は変わりうるのか その兆しを探る . 日本発達心理学会第 30 回大会(東京).
- 江上園子 (2018). キャリア志向及び「母性愛」信奉傾向とワーク・ファミリー・コンフリクトとの関連 就業形態による検討 . 日本教育心理学会第 60 回総会(東京).
- 江上園子 (2018). キャリア志向及び「母性愛」信奉傾向とワーク・ファミリー・エンリッチメントとの関連 予備的検討 . 日本発達心理学会第 29 回大会(仙台).
- 江上園子 (2017). キャリア志向女性の母親としての評価とキャリアの再定義 「母性愛」信奉傾向に関する出産前後のインタビュー調査から . 日本心理学会第 81 回大会(福岡).
- 江上園子 (2017). 初産女性における「母性愛」信奉傾向に関する語りの産前産後比較. 日本発達心理学会第 28 回大会(広島).
- 平井美佳・江上園子・福丸由佳・加藤容子・大野祥子・芦澤美智子 (2016). 子育て中野親における仕事と家庭の主體的調整 “母親” または “家族” イデオロギーを超えて . 日本発達心理学会第 27 回大会(札幌).
- 江上園子 (2014). 養育者としての意識と性役割観との融和・相克 父親と母親の語りから . 日本発達心理学会第 25 回大会(京都).
- 江上園子・大久保智生・荒牧美佐子・澤田匡人・平井美佳・上瀬由美子 (2013). 「思い込み」を疑う データに基づいた言説の解体 . 日本心理学会第 77 回大会(札幌).
- 江上園子 (2013). 「母性愛」信奉傾向が夫婦関係と養育態度に与える影響. 日本教育心理学会第 55 回大会(東京).
- 江上園子 (2013). 夫婦の「母性愛」信奉傾向と夫婦関係満足度及び養育態度との関連. 日本保育学会第 66 回大会(福岡).

〔図書〕(計 2 件)

- 江上園子 (2015). 母親の「母性愛」信奉 : 実証研究から見えてくるもの. ナカニシヤ出版: 京都.
- 江上園子 (2014). 養育者の育児不安と子どもの発達, 養育者の母性愛・「母性愛」信奉傾向と子どもの発達. 遠藤利彦・石井佑可子・佐久間路子(編著), よくわかる情動発達(pp. 160-163). ミネルヴァ書房: 京都.